

歴史教科書における日中関係の取り扱いに関する研究

～高等学校を中心として～

菊池 遼太郎

1. 論文構成

- 序章 問題の所在と研究の目的
 - 第1節 問題の所在
 - 第2節 研究の目的と方法
 - 第1章 これまでの日中間の取り組み
 - 第1節 共通歴史教材作成の段階における取り組み
 - 第2節 実践の段階における取り組みとその意義
 - 第2章 日本と中国における教科書作成の過程
 - 第1節 日本における教科書作成の過程
 - 第2節 中国における教科書作成の過程
 - 第3章 日本と中国の教科書の分析
 - 第1節 日本と中国の教科書分析
 - 第4章 日中間の歴史認識を育てる授業実践の分析と考察
 - 第1節 日本での実践についての分析と考察
 - 第2節 中国での実践についての分析と考察
 - 終章 本研究のまとめと課題
 - 第1節 本研究のまとめ
 - 第2節 今後の課題
- 参考文献・参考論文・参考 URL

2. 問題の所在

日中関係に存在している問題は数多くあるが、主なものは、歴史認識など過去をめぐる問題（靖国神社参拝、歴史教育の問題）など、両国の国民間における相互理解の不足、国際政治における両国の政策（国連改革など）の不一致、東シナ海における資源開発などの海洋における権益の問題、経済問題（貿易摩擦、知的財産権の問題など）、中国の軍事力増強など安全保障上の問題である。これらの問題を解決していくためには日中両国がこれまでよりもさらに相互理解を深めなければいけないと筆者は考えている。このような日中関係の悪化を改善するためにはまず学校教育の段階からお互いの国について学習していく必要がある。日中間における課題も日中両国民が歴史的事実を学ぶことにより解決への第一歩を歩み始めるはずだ。またここで、なぜ筆者が高校日本史に注目したかという理由を述べておく。その理由に1982年の歴史教科書問題がある。この問題では、高校日本史の教科書における記述が問題になり世界各国に大きな反響を呼んだ。本研究ではこの歴史教科書問題にも触れつつ、研究を進めて

いくため高校日本史における日中関係について取り扱う事とする。

しかしここで大きな問題がある。それは日中両国における日中関係に対する理解のギャップがあるのではないかという問題だ。日本と中国で全く同じ歴史が教えられてはいない。むしろ両国には歴史認識が異なるという大きな問題がある。このように教科書問題や領土問題などの国家間の摩擦は必ずと言っていいほど歴史認識の問題が根底にある。正確な歴史認識を身につけるためには歴史の基本的な事実・流れの客観的認識が必要であり、さらに歴史的評価を加えること。そして自国のみだけでなくアジアという地域としての構成の再認識が必要ではないかと筆者は考える。そしてそれが昨今の日本が抱えているアジア諸国間との問題を解決すると筆者は考えている。

そこで本研究では、日本と中国で教えられている日中関係を分析し、両者を比較しながら、学校現場でどのように取り扱っていくべきか考察し研究していく。

3. 研究の目的と方法

本研究の目的は、日本と中国で教えられている日中関係について日本と中国の教科書を比較分析しながら考察していくことである。

研究の方法としては、日本と中国で使われている教科書のとりわけ日中韓に関連深い記述を抜き出し、同じ事象を扱う記述を

どのように表現しているのか比較していく。その上で日中両国での取り扱いを比較・分析し、どのような点に問題があるかを検討する。そしてそれを基に学校現場で日中関係がどうあるべきかを考察し、授業実践例を分析考察し今後のあるべき歴史認識教育に対しての共通歴史教材の可能性を考えていきたい。

3. 論文の概要

第1章ではこれまでの日中間の歴史認識をめぐる問題についての取り組みとしてどのようなことがなされてきたのかを考察した。第1節では共通歴史教材作成の段階におけるこれまでの取り組みとして6つの共通歴史教材を取り上げ特に2012年に発行された『新しい東アジアの近現代史 上—国際関係の変動で読む 未来をひらく歴史—』・『新しい東アジアの近現代史 下—テーマで読む人と交流 未来をひらく歴史—』の編纂課程について表を用いて考察した。第2節では実践の段階における取り組みを考察した。現在までに日本と中国では両国の歴史認識に関わる授業実践は小・中・高などの校種を問わず数多く行われている。詳しくは第4章で考察するが、本項では高等学校などの中等教育段階での実践の取り組みについて述べた。そしてその中で齋藤一晴氏は現在の歴史認識には3つの課題があると指摘している。1つ目は歴史教科書

の機能とそれが持つ宿命的役割そのものを学ぶこと。そしてその機会を、国民国家やその歴史を強化することを理解するだけに止まらせず、歴史教科書の歴史叙述に反映された歴史の描き方を研究、実践の両面から検討することで、歴史の見方、叙述の可能性が生まれることを学ぶことが欠かせない、ということである。2つ目は中国の各世代が認識している日本の戦争犯罪は、必ずしも歴史教科書から知識や情報を得ている訳ではないということ。3つ目は、大学における講義・実践を充実させる必要性があるということ。

第2章では日本と中国における教科書作成の過程について考察し、各国における過程の中での課題について考察した。第1節の第1項では日本の教科書検定制度を石山久男氏の『教科書検定¹』を参考にしながら考察し大きな問題があるのではないかと指摘をすることができた。第2項では日本で起こった歴史教科書問題について触れ、教科書がどのようなものでなければなら以下という筆者の意見を述べた。第2節の第1項では諏訪哲郎・王智新・斉藤利彦の三氏による編著『沸騰する中国の教育改革²』を参考にしながら中国の教育改革に伴う課程改革について述べた。これを通して中国の課程改革の結果、画一的であった課程構造からの脱却は生徒の問題解決能力の向上を促進すると筆者は考える。第2項

では、中国における教科書制度について王智新³氏による研究「中国における歴史教科書の実態とその変遷」を参考にして述べた。1986年以降、教科書制度の改革が行われ、統一した基本要求、統一審査という前提に、教科書の多様化を順次実現していくという事されてきた。

第3章では日本と中国の教科書分析を行い、実際に使われてきた両国の歴史教科書を比較検討した。第1項で行った構成の分析に関しては、比較してみると日本側の教科書よりも中国側の教科書の方が章や節が多く細かく分類されていると言える。内容叙述についての分析の考察については、全体的に見て日本側の叙述は事象を客観的に捉えているのに対し、中国側の叙述は若干中国側によっている叙述になっている。また、主な事象について年代などの表記に差は見られなかったが、いくつかの日本と中国間で交わされた条約の内容が異なるということが発見できた。叙述の内容全体を通していえることは、日本側は客観的な叙述を用いているという事である。また中国側は、客観的な叙述も見られるが、時折愛国主義的な言い回しが用いられる点があるという事である。さらに社会主義的な思想を称賛しているかのような表現や、個人を非難するような表現が存在するという点も注目すべき点である。つぎに全体の文字数に関してであるが、日本側と中国側の叙述の

バランスは大きく異なっていたと言える。とくに「五・四運動」に関しては中国側が多く叙述しているのが目立つ。それ以外は「第二次世界大戦その1」の部分で中国側が叙述0であるという点以外はそれぞれの割合は似たようなものとなった。しかし比較的中国側の教科書の方が各事象に対する文字数は多めとなっている。これは中国側の教科書が各事象における国内の状況を細かく叙述していることが原因と考えられる。

第4章では日中間の歴史認識に関することを取り上げた実践例を紹介し、分析考察した。第1節では日本側の二つの実践を取り上げ、どちらの実践でも日中韓3国共通歴史教材委員会編著『未来をひらく歴史：東アジア3国の近現代史：日本・中国・韓国=共同編集』（高文研、2005）を使った実践を取り上げた。『未来をひらく歴史』などの共通歴史教材を用いることによって一国から見た歴史だけではなく、複数の国から一つの事象を見ることによってより客観的に歴史的事実を見ることができると筆者は考える。これらの実践を通して共通歴史教材と普通の教科書の違いについていえることは三つあり、一つ目はどこの国にも属していない内容になるということ。二つ目は細かな歴史が書かれているということ。三つ目は資料が豊富であるということだ。複数の国から歴史を見ることが多面的・多角的に事実を見ることができるとい

とだ。生徒たちはこのような見方ができるようになることで深い歴史認識を身に付けていくのではないだろうか。

4. 今後の課題

今後の課題は大きく二つある。一つ目は教科書分析について、今回は事象をピックアップする形にしたが、歴史認識の溝は大きく深いものである。よって構成やすべての叙述を対象とした教科書分析が必要なのではないだろうか。

二つ目は共通教材の活用方法について考察しきれなかった点である。分析を通して現在の教科書についての問題点はある程度見えてきたが、それを解決する道筋をしっかりと当てることができなかった。さらに現段階で行われている共通教材作成の取り組みにも着目して、日々進化している共通教材を取材してどのような形での共通教材が今日の教育には必要であるのか見極めなければいけない。

¹ 石山久男著『教科書検定』（岩波書店、2008）。

² 諏訪哲郎・王智新・斉藤利彦編著『沸騰する中国の教育改革』（株式会社東方書店、2008）。

³ 諏訪哲郎・王智新・斉藤利彦編著『沸騰する中国の教育改革』（株式会社東方書店、2008）。